

にいえば、それぞれの兼務であっては、主体的・独立的な郷土資料館の運営に制約をうけることになるからです。早急に、郷土資料館を独立機関として人的配置をし、運営を推進する郷土資料館運営委員会を設置すべきです。これが不可能でも、資料館専任事務にたずさわる人員を配置すべきです。資格のある^{がくげいいん}学芸員の配置とはいかないまでも、資料館建設に当って臨時雇用^{りんじこよう}した体験を生かすべきで、あの展示内容や作業に見せたパワーを専任的な仕事として持ち続けたいものです。ここにも、「はじめからだれでも専門家ではない」のモットーを確認して、長い目で人材を育てていくことが最も大切なことなのです。開館して1年を経れば、陳列替え^{ちんれつが}ともからみあい調査・研究がいやでも必要になってきます。是非とも、資料館専任事務員が欲しいところです。

また、郷土資料館をどのように役立てさせるかの問題もでてきます。村民や県民さらに県外の人々にも、有効適切^{ゆうこうてきせつ}に利用してもらおう手だてをどう講^{こう}じるかは、頭を悩ます問題になってきます。学術的な価値尺度だけでは、入館者を動員することはできません。特に、本館は観光ルートから外れた農山村部^{うんえい かわわ}での運営に係るので、サービスのためのアイデアをださねばなりません。野尻湖発掘時のナウマンジュウをまねて、カイギュウマンジュウとか、緑色凝灰岩（荻野石^{やわら}）の軟かい石質を利用してインテリア風な加工物をつくるとか、いろいろなサービスを考えてみる必要があります。

このような直面しているいずれの問題点も、過疎^{かそ}の地方自治体がかかえている財政難によることが一番大きな原因になっています。せつかくの郷土資料館完成も、金と政治力と学者の権威のいかんによって存続^{あや}が危ぶまれる脆^{もろ}さも秘^ひめているという、これは最近文化施設をつくる地方自治体が多いなか、地方文化のあり方に関する共通課題の一つになっているところです。それにしても、私たちは、地元住民の郷土の文化財を愛する心の強さを見たいま、常に地元の理解と協力をえる努力を惜しまず、調査・研究の成果を地元^{かんげん}に還元していくならば、つまり地元主義、それに自前精神の活動を続けていく限り地元住民はたくましい力を発揮し、多くかかえている困難な課題^{こくなん}を克服していくものと思われま。郷土資料館のあり方をいっしょになって考えていくことが、新しい展望^{てんぼう}を持ちえることにつながるのです。それにどうしても、高郷村郷土資料館が、この地方の教育や研究に役立ち、地方の文化を発展させていく、その役割を背負い続ける、という願いを私どもはもっています。

追記

なお、資料館第一展示室を完成するにあたって次の方や団体から心温まる協力をいただきましたので紹介します。